

日本における大学生の生活行動と意識構造

特に専攻系列別比較を中心として^{注1}

駒 崎 勉

I 研究目的

現代の青年，とりわけ大学生の行動様式や意識構造は，いかなるものなのであろうか。それを明らかにする方法も，例えば“N=1”のスタイルで，個としての青年を多面的かつ厳密に精査することもあれば，実験的手法を通して操作的に捉えることも出来よう。しかしここでは，質問紙法により，鳥瞰図的に蓋然的な青年像を理解しようと試みる。

本研究でとりあげる調査内容は，大学生の A. 大学生活，B. 宗教，C. 職業，D. 余暇，E. 政治社会，F. 文化，G. 友人・異性，H. 家族 など 8 領域に関するもので，比較的，青年のパーソナリティの表層かつ外界との接点にかかわる部分である。こうしたエコロジー的考察には質問紙法によるアプローチが比較的，利便かつ妥当と思われる。

ところで筆者は，1965 年以来，4 年ごとにこの種の調査を行っており^{1),2)}，今次調査で 6 回を数える。質問項目も可能な限り同じ内容にしているため，時代の影響によって青年像の変る部分と変らぬ部分が明らかになりつつある。それはそれなりの成果であらうが，今回は，やや異った視点に立って大学生の専攻分野により，どれ程かれらの行動様式や意識にその特性が現われるか，また性差はどうか，などに重点を置いて考察をすすめていく。これは現代の大学生が自らの専攻分野にどれほど自己の主体性や特性を活しているか，あるいは動機の達成が果されているか，など知ろうえの手がかりを得ることになると思う。

なお，本調査でとりあげた青年の問題は，かれらの生活を取りまく相当広範な領域で，調査項目も多数にのぼる。従って調査結果も量的に膨大なものとなるので，本データ利用のさいの便宜を図る意味から，考察の個所で随時，キーワードを挙げて，要約に代えている。

注 1 本研究の一部要約したものは，速報として 1987 年 10 月，第 51 回日本心理学会大会人格部門において口頭発表を行っている。

Ⅱ 調査方法

1 調査時期および調査対象者 1985年12月より86年2月にわたって調査を行った。調査協力大学^{注1}と、その所在地は次の通りである。北海道1, 福島1, 群馬2, 栃木1, 埼玉3, 東京3, 静岡2, 富山, 石川, 愛知, 大阪, 兵庫, 鳥取, 福岡各1, 計20。内, 国立3, 他は私立。

上記大学の男女学生2,500名に対し質問紙法による調査を実施した。対象者の年齢は18~20歳とし, 大学1~3年生が該当している。調査時期を学年末の12~2月を選んだ理由は, 1年次生が大学に順応した時期と判断したからである。また4年生を対象から除外したのは, 卒業期を控えて, すでに社会人としてのレディネスをもち, 大学生を代表するデータとはなり得ぬからである。

さて, 上記2,500人のデータから, 日本の大学生の専攻系列別構成比率³⁾に基いて, ほぼそれに近似するように, 男女各600名計1,200名を抽出した。表1は, 実際の構成比と, 今回の調査対象者の構成比率を比較したものである。期待値にほぼ近似したものであり, 本調査結果が日本における大学生の姿をかなり正確に描き出しているといえよう。

2 調査方法と調査内容 質問紙(生活調査票)を各大学で対象者に手渡し, 原則として教室内で一斉に記入させた。調査は無記名であるが, 多くは授業時間中の実施で回収率は高く, 95~

表1 大学専攻系列別在籍者^{注2}と本調査の対象者

専攻系列別	男					女						
	大学	構成比	短大	計	今回の対象者	左欄の構成比	大学	短大	計	構成比	今回の対象者	左欄の構成比
	千人	%	千人	千人	人	%	千人	千人	千人	%	人	%
人 文 系	22	7.7			46	7.7	35	39	74	30.5	150	25.0
社 会 系	135	47.2			294	49.0	14	11	25	10.3	153	25.5
理 工 系	89	31.1	略	略	175	29.2	4.5	5	9.5	3.9	34	5.7
保健・体育・医歯系 ^{注3}	25	8.7			60	10.0	11	8.5	19.5	8.0	33	5.5
教 育 系	15	5.2			25	4.2	17	40	57	23.5	130	21.7
家 政 系	—	—			0	0.0	8	49.5	57.5	23.7	100	16.7
小 計	286	99.9			600	100.1	89.5	153	242.5	99.9	600	100.1
その他の諸学科	24 ^{注4}	—			—	—	13.5	12	25.5	—	—	—
計	310	—	9 ^{注5}	319	—	—	103	165	268	—	—	—

注1 一地域に大学の学部が独立して設置されている場合は, 一大学として数え, 同一地域に学部が複数ある場合は, 合せて一大学として数えた。

2 昭和58年5月1日現在の大学1年次在籍者数(昼間部のみ)

3 以下本文中では「医系」と称し, 表の中では「医・保・体」と略記した。

4 上記6系列以外の分類困難な諸学科は, 本調査の対象から除外した。

5 全国で9千人の少数のため, 今次調査には加えなかった。

100%に達した。質問事項は、Ⅲの結果と考察の項で順次示すが、さきに述べたごとく、8つの領域にわたっている。これらの領域と項目の設定は、1954年の教師養成研究会が実施した調査⁴⁾の項目によるところが多く、これらを比較する時、30余年の時代の変化を捉えることも可能である。

Ⅲ 結果と考察

以下、調査で取上げた8領域ごとの結果を示したあと、考察も各領域ごとに併せてすすめていく。また、表示した人文、社会など6系列の専攻分野別結果は、系列全体の平均した結果と比較して有意差のあるもののみ当該欄に*を付し、同じく系列全体の中で性差のあったものには、男女両欄にまたがって*を付しておいた。これらは χ^2 検定の結果、 $p < 0.05$ 以下のレベルで有意差のあったものである。また表中、医歯、保健、体育系については、医歯専攻者の比率が高いため、本文中では、「医系」と表現している。なお、表示した数値は%である。

〔A〕 大学生活に関する調査結果

① 大学入学の目的、動機

表 2 (%) (N=♂600 ♀600) 回答は1人2個を原則としている

項目	性	専攻系列						平均
		人文	社会	理工	医・保・体	教育	家政	
⑦就職のため	♂	23.3*	48.0	46.9	30.0*	56.0*	—	44.8
	♀	35.3*	52.3	52.9	33.3	61.5*	34.0*	46.0
④結婚相手を見つけるため	♂	0	2.4	0	0	0	—	1.2
	♀	0	1.3	0	0	0	1.0	0.5
⑤勉学のため	♂	47.8*	22.4	26.3	23.3	48.0*	—	26.7
	♀	35.3	28.1	44.1*	30.3	25.4	22.0*	29.3
⑥親にしいられて	♂	0	2.0	2.3	3.3	4.0	—	2.2
	♀	2.0	3.9	0	3.0	0.8	5.0	2.7
⑧公的資格を得るため	♂	21.7	27.9	33.1	71.7*	56.0*	—	34.5
	♀	13.3*	17.6*	23.5	72.7*	75.4*	37.0	35.7
⑨学歴をつけるため	♂	34.8	44.9	38.3	13.3*	1.2*	—	37.7
	♀	54.7	44.4	41.2	18.2*	84.6*	42.0	37.2
⑩なんとなく遊べるから	♂	43.5*	27.2	24.0	5.0*	8.0	—	22.5
	♀	32.7	24.2	29.4	12.1	11.5	27.0	23.6
⑪その他	♂	21.7*	7.5	5.7	3.3	8.0	—	7.7
	♀	4.7	3.9	8.8	3.0	3.1	2.0	3.8
⑫無答	♂	0	8.8	2.9	38.3*	0	—	9.0
	♀	0	0	2.9	21.2	0	15.0	3.8

②大学生の長所と短所 この項目については自由記述のため明確な数値にまとめがたい。傾向のみを略記する^{注1}。

男子 長所：人文系，1位「明るく積極的」，2位「自由闊達」。それ以外の系列では上記1，2位が入れ替り，3位はすべての系列で「柔軟な思考」を挙げている。

短所：系列間の差はない。1位「無気力，個性の欠如」で社会系の60.2%，人文系の43.4%が最大値，2位「無責任」，3位「目的なく生活する」，で人文系の30.4%が最大値，4位「不勉強，遊びすぎ」で社会系のみこれが2位となって39.1%の最大値。

女子 長所：系列間に差は認められぬ。1位「明るい」，2位「自由闊達」，3位「社交性，適応力」，4位「しっかりしている」。

短所：教育系以外の系列では差がほとんどない。1位「不勉強，遊びすぎ」，2位「無気力，不まじめ」，3位「自主性欠如」，4位「幼稚」。教育系では，1位「軽薄，幼稚」，2位「無気力，不まじめ」，3位「不勉強，遊びすぎ」，4位「自主性欠如」。

③アルバイトの経験（年間）

表 3 (%) (N=600×2)^{注2}

項目	性	専攻系列	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦ほぼ毎日	♂		8.7	13.9	4.6	1.7	12.0	—	9.5
	♀		7.3	14.4	26.5*	3.0	12.3	3.0	10.3
㊧6カ月以上	♂		15.2	12.2	6.9	3.3	32.0	—	10.8*
	♀		30.0	35.9*	26.5	18.2	26.2	18.0	27.8
㊨1カ月以上6カ月未満	♂		39.1	37.1	30.3	11.7	24.0	—	32.2
	♀		33.3	25.5	17.6	9.1	33.8	35.0	29.5
㊩1カ月以下	♂		21.8	26.8	38.9	26.7	24.0	—	29.9*
	♀		22.0	11.1	8.8*	24.3	13.1	32.0	18.4
㊪全くしない	♂		15.2	7.8	18.9	53.3	8.0	—	16.1
	♀		6.0	12.4	20.6	39.4*	14.6	12.0	13.2
㊫無 答	♂		0	2.0	0.6	3.3	0	—	1.5
	♀		1.3	0.7	0	6.1	0	0	0.8

上記表3の㊩1カ月以下を，さらに年間10日以下のものと，11日以上1カ月以下のものに分けると次のようになる。

男子：全系列平均10日以下12.7%，同11日～1カ月17.2%。計は㊩に同じ。

女子：同上それぞれ7.7%，10.7%。計は㊩に同じ。

また，「10日以下」と上表㊪を合算した実質的なアルバイトゼロ組をみると，男子は28.8%，女子は20.9%になる。この場合，男子医系の68.3%，理工系33.2%，そして女子医系の54.6%，家政系の24.0%が特に目立つ。

注1 以下の各項目についても，自由記述による回答の場合や，単に順位を問うような設問，あるいは表にするほどの意味のないものなどについては，本項と同様に，回答の傾向のみを略記するにとどめた。

2 表3以下すべての表で，被験者数男子600人，女子600人を，(N=600×2)と略記する。

④授業中の「代返」や「代理出席票の使用」

表 4 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉗常に行っている	♂	2.2	9.2*	5.7	3.3	0	—	6.6
	♀	2.0	3.3	0	0	2.3	1.0	2.0
㉘時々する	♂	32.6	40.1*	22.9*	28.3	44.0	—	33.8
	♀	48.0*	41.8	5.9*	24.2	35.4	36.0	38.0
㉙ごくまれにする	♂	41.3	31.3	31.4	45.0	36.0	—	33.6*
	♀	33.3*	39.2	44.1	60.6*	49.2	47.0	42.7*
㉚全くしない	♂	23.9	17.3	40.0*	20.0	20.0	—	24.8*
	♀	16.7	14.4	50.0*	12.1	12.3	15.0	16.5*
㉛無答	♂	0	1.4	0	3.3	0	—	1.0
	♀	0	1.3	0	3.0	0.8	1.0	0.8

⑤大学（制度）に対する印象と評価

男子 人文系以外の全系列が1位「入学制度」で「入りに難しく、その後のルーズさ」を挙げ20%、人文系のみ1位「学科目のつまらなさ」19%、2位「社会の学歴偏重観、大学の格差づけ」、人文系のみ「一般社会と遊離した教科内容」、3位「大学の個性欠如」、4位「専門科目の不足、学費の高さ」。

女子 ほとんど男子と同様、人文系の特異な回答順位も男子と同じ。

⑥大学生活への満足感

表 5 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉗あ	♂	54.3*	31.0	32.0	28.3	36.0	—	33.0*
	♀	34.7*	26.8	23.5	18.2	2.3*	17.0	21.2
㉘なし	♂	15.2	16.7	17.7	11.7	24.0	—	16.7
	♀	17.3	23.5	11.8	9.1*	35.4*	15.0	21.7
㉙どちらともいえない	♂	19.6*	42.5	29.1	46.7	32.0	—	36.8*
	♀	34.0*	41.8	50.0	45.5	49.2	61.0*	45.3*
㉚分からない	♂	10.9	8.2	18.9	10.0	8.0	—	11.7
	♀	13.3	6.5	11.8	21.2	12.3	4.0	10.2
㉛無答	♂	0	1.7	2.3	3.3	0	—	1.8
	♀	0.7	1.3	2.9	6.0	0.8	3.0	1.7

⑦大学教員に対する印象と評価

男子 長所：1位「親しみやすさ、寛容」で系列差はなく23%、2位「博識」、教育、理工系では「学生思い」、3位「学生思い」、教育、理工系は「博識」、4位「熱心な指導」で系列差なし。

短所：1位「自己中心的」、理工系は「ユーモアに欠く」、教育系は「やる気に欠く」、2位「画一的指導、ユーモアに欠く」、教育系は「自己中心的」、3位「やる気に欠く」、理工系、教育系では「威張る」、4位以下は「威張る」、「教授法のまずさ」、「能力の不足」、「冷酷」など。

女子 長所：1位「親しみやすさ」、社会系では「熱心な指導」、2位「博識」、社会系は「親しみやすさ」、3位「思いやり」、4位「人格者」。

短所：1位「自己中心的」、社会系では「やる気に欠く」、2位「親しみに欠く」、ユーモア欠如、3位「指導力に欠く」、4位「やる気に欠く」、社会系では「自己中心的」。

考 察

表2に示したごとく、大学入学の目的は男女ともに就職のため、が多く、5割に達する。勉学を挙げたもの、公的資格取得のためも各3割内外を占めたが、一方、何んとなくや、遊ぶため、が1/4に近い。2つ回答させているので、やや誇張した結果ともいえるが、かれらにとって大学は究極的（卒業時）には就職のためのパスポートであると同時に、レジャーランド的機能を入学当初から求めていることが分る。系列差が若干みられ、人文系で就職目的よりも勉学のためを挙げたものが有意に多い。しかし同時に遊ぶ目的のものも最も多い。これは人文系特有のリベラルな学生像が今も残っているように感じられる。このことは表5を見ても、人文系が突出して大学生活に満足感を持つ者が多い（男子54%、女子35%）こととも関係ありそうだ。なお15年ほど前までのこの種の調査では、女子に結婚相手をみつけるため、と答えたものがかなりあったが今では0.5%となっている。

次にかれらの自己認識として長所と短所を自由に挙げさせた結果をみよう。全体的に長所として自由闊達な行動力や明るい積極性が多く、短所では、無気力で個性に乏しく、無責任さを多く挙げている。これらの自己認識像は、つねに一般社会や企業人から指摘されていることであり、特に改めて自己の内面を見出すような者は少ない。認知されている自己と、気づいてる自己との間に差がないことはかれらの客観的態度の現われ、と評価できる。しかし長所よりもむしろ短所をより多く、より端的に挙げていることは、弱点に対する防衛的弁解とも読みとれる。YG検査を用いた青年像の研究⁵⁾によれば、大学生たちが理想とする青年像と、現実の自己像とがかなり乖離していることを青年たちはよく気づいている、という。これらの結果も、青年のたんなる客観性というよりも、葛藤以前の自己防衛的弁解の態度がうかがわれる。また、かれらが、明るく自由で積極性を挙げても結局は無気力や無責任さが根底にあるとすれば、内面の乏しさもまた否めない。

キーワード：学生生活、自由な行動力、無気力、就職へのステップ

アルバイトに対するかれらの情熱は大きい。表3に示したように、社会系では男女とも14%がほぼ毎日している、という。理工系、教育系のそれは家庭教師が主で、これはうなづけるが、女子にアルバイトが多いのは経済的な苦しさの故であろうか。人文・社会系では、男女ともに2/3～3/4が日常的なアルバイトを行っており、勉学上の大きな妨げとなることは疑いなく、大学での

学力低下の最大の理由の一つであろう。後述の小遣いの金額を合せみる時、大学のレジャーランド化にアルバイトの過多が原因しているようである。

次にいわゆる代返や出席カードの不正使用についてみよう。男女とも似たような結果で常習組と時々する、を合わせると約4割が不正をしており、全くしない、をはるかに上回る。前述のようなアルバイト生活では出席を他人に依頼して当然であろう。系列別では社会系に不正が多い。社会系に多いマンモス授業と、かれらの適応性も共に関係があろう。

キーワード：アルバイト過多，代返，適応性

大学制度に対する印象や評価については、人文系にやや異った見方があるほかは系列差がなく、性差もほとんどない。

最も多い回答が、入るに難しく、一度入れば大学にはだらけた気風や、卒業までの比較的楽な履修条件があって、高校時代にくらべてその落差の大きさに驚く、といった答が多い。人文系の学生が、つまらぬ内容の学科目や社会生活から遊離した学問など挙げているが、人文系が他の系列とはしばしば異った視点に立つことが多く、注目される。また、いわゆる有名校に近い国立大の学生ですら、現代社会の学歴偏重観が今日の大学入試制度に起因している、と指摘していることも注目してよい。

大学教員に対する評価をみてみよう。長所にあげた特徴とは反対の特性も多く、一見矛盾しているようであるが、これは例えば、教員の中には、やる気のない人もいれば熱心な人もいる、という意味であろう。

すでに述べた長所短所のうち、1, 2位は数量的には突出しており、キーワードに示したように、親しみやすさ、該博な知識、そして一方では自己中心的なわがままな態度と、ユーモアの欠如などが現代大学教員の最大公約数的特性ともいえる。大学教師像の大学生による認知について⁶⁾の研究によると、権威主義、親しみ、研究的態度等の因子が見出されているが、本調査も近似しているといつてよい。長所については、教員に対する学生からの期待像であり、一方、短所については、教師は自戒として捉えるべきことがらであろう。

キーワード：大学教員，親しみと博識，自己中心性とユーモア欠如

大学生活への満足感については表5に示してある。全体として男子の1/3，女子の1/5は満足しており、どちらともいえぬ中間層が多数を占めている。また不満足とするものはほぼ2割である。系列別では人文系に満足する者が多いことはさきにも指摘した通りで、人文系学生が自己の志望コースをほぼ選択出来たことをうかがわせる。不満足を訴えた者は教育系に最も多い。教員採用の狭き門を予想してのことだろうか。

キーワード：大学生活，入るに難く出るに易し，ほぼ満足

〔B〕 宗教に関する調査結果

①宗教の必要性の有無

表 6 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦生活に宗教は必要である	♂	10.9	11.2	10.3	18.3*	8.0	—	11.5
	♀	12.0	8.5	0	15.2	14.6	5.0	10.0
①不必要である	♂	43.5	46.9	32.6	26.7*	32.0	—	39.8*
	♀	25.3	35.9	26.5	15.2	21.5	27.0	27.0
㊧どちらでもよい	♂	37.0	31.6	39.4	46.7*	52.0	—	36.7*
	♀	44.0	44.7	58.8*	63.7*	43.8	51.0	47.2
㊨分 ら ぬ	♂	8.7	10.2	17.7	6.7	8.0	—	11.8
	♀	18.7	11.1	14.7	3.0*	18.5	17.0	15.3
㊩無 答	♂	0	0	0	1.7	0	—	0.2
	♀	0	0	0	3.0	1.5	0	0.5

②宗教を信じない者は何を精神的な拠りどころにしているか

表 7 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦自 己	♂	43.5	41.8	42.9	21.7*	56.0*	—	40.8*
	♀	30.7	32.0	41.1*	21.2	27.7	26.0	29.7
①友 人	♂	17.4	19.0	12.0	23.3	12.0	—	17.0
	♀	18.0	23.5	23.5	21.2	16.2	15.0	19.0
㊧親やきょうだい	♂	0	6.4	3.4	8.3	8.0	—	5.3
	♀	7.4	7.8	17.6*	9.1	8.4	7.0	8.3
㊨恋 人	♂	8.7	5.1	8.6	3.3	0	—	6.0
	♀	4.7	7.8	0	3.0	6.2	5.0	5.5
㊩そ の 他	♂	4.3	3.4	4.6	6.7	8.0	—	4.3
	♀	4.0	3.9	2.9	18.2	4.6	5.0	5.0
㊪分 ら ぬ	♂	4.3	9.9	20.0*	20.0*	12.0	—	13.5*
	♀	18.7	13.1	8.8*	9.1*	24.6	22.0	18.0
㊫無 答	♂	21.7*	14.3	8.6	16.7	4.0	—	13.0
	♀	16.7	11.8	5.9	18.2	12.3	20.0	14.5

③自分の意志で宗教団体に加入（入信）しているか

表 8 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
⑦加入している	♂		6.5	4.4	5.7	10.0	4.0	—	5.5
	♀		2.7	2.6	2.9	6.0	5.4	3.0	3.5
④加入していない	♂		91.3	92.2	91.4	88.3	96.0	—	91.7
	♀		95.3	96.1	97.1	90.1	91.5	95.0	94.5
⑦無 答	♂		2.2	3.4	2.9	1.7	0	—	2.8
	♀		2.0	1.3	0	3.0	3.1	2.0	2.0

考 察

大学生が、宗教をいかに位置づけているか、またどんな関わり方をしているかなど、青年の心の内奥の問題をとりあげてみた。

宗教の必要性については、表6にあるように全体のほぼ1割がありと答え、性差がない。また男子の4割、女子の3割は不必要、と答えている。しかし大多数は、どちらでもよい、としている。必要、不必要の最大の理由としては、前者には精神的な支えとして、祖先を大切にするため、家が前から信仰しているので、の順で挙げている。後者は他を頼ることは自分をダメにする、といった内容のものが多。かれらにとって宗教は身近かな問題ではないらしい。それはかれらが自然や形而上の問題に対して傲慢ということではなく、神道、仏教、キリスト教に加えて極めて多数の宗教団体が混在している日本の特殊な状況下では、かえって宗教を遠い存在にしてしまうようである。他の調査研究例⁷⁾をみても、女子大生の83%が信仰には関心がない、と答えているように、“飽和状態”が無関心さをつくるとも考えられる。このことは表8の宗教団体への自己の意志による加入、入信の数をみると一層明らかとなろう。日本では宗教人口は2億708万人⁸⁾といわれる^{注1}。多くの宗教団体は自らの信仰組織への帰依者の幅広さを自認しているようであるが、本調査では自分の意志で入信している者は僅かに男子5.5%、女子3.5%に過ぎず、92~95%は加入していない。これが実態であり、現存する宗教が青年の心を動かす説得力を持たないことは考えさせられる。

それでは宗教を信じない大多数のかれらは何を心の拠りどころにしているのか表7を見よう。最も多いのは男女とも、「自己」であり、男子の41%にも達する。友人とのかかわりの深いかれらも、最後の拠りどころは自分なのである。これも主体性をもった人間の生きざまとして、わが国のような宗教的風土の中では当然な答ともいえよう。しかしそうであれば、他我を愛することができるような精神構造の枠組みの中で自己を拠りどころにしてほしいものである。それが出来

注1 有力な宗教団体加入者数をみると、仏教系2,700万人、諸教1,200万人計3,900万人、これにキリスト教105万人を加えると4,000万人を超えてしまう。

た時、最早や selfish な自己依存ではなく、立派な宗教的な自己への意識といえよう。宗教が青年の精神構造の中に入りこめぬ社会風土をもつわが国では、他我を愛する教育環境が望まれる。なお、宗教に関する本調査では、性差があまり見られなかったが、宗教への関心の稀薄さは性差を超えた普遍的傾向を意味するといえよう。系列間の差も少ない。僅かに医系が何を抛りどころにしてよいか分らぬ、と答えた者が多かったが、これが何を意味しているかは不明である。

キーワード：宗教，無関心，自己依存

〔C〕 職業に関する調査結果

①職業選択の基準

男子、女子 両者ともに全く同じ順位とウエイトづけをしている。また系列差もない。すなわち、1位適性、2位企業（団体）の内容、3位給与、4位就職先の社会的知名度。

②卒業後の就職先の規模についての希望

男子 1位大企業45%，2位中企業30%，3位個人企業9%，4位小企業4%，系列差はない。大企業希望の理由は安定性が第一、一方個人企業希望者は個性の発揮する可能性を挙げている。

女子 1位大企業39%，2位中企業35%，3位以下は男子と同様な傾向。系列差は人文系のみ大企業の35%を、中企業の42%が上回って1位となっている。

③就きたくない職業（種）

男子 1位セールスマン，2位一般事務，3位教員で，各20～30%を占める。系列間の差は少ない。

女子 1位セールスウーマン（売り子），2位水商売（サービス業），3位教員，全体的にバラつきが多く，1位でも10%程度で，きれいな職は多種多様である。系列別では，家政系は1位水商売（サービス業）であるのに対し，これが社会系では4位に下がる。

④就きたい職業（種）

男子 系列間の差が大きい。人文系では1位教員30%，2位公務員20%，3位自由業11%，社会系では，1位自営業18%，2位公務員17%，理工系では1位技術者31%，2位公務員20%

女子 系列差は大である。人文系1位一般事務10%，社会系同じく26%，家政系，18%。理工系1位技術者21%，医系1位医師48%，教育系1位保母24%，2位教員18%，その他全体として公務員，教員，マスコミ関係などがこれに次ぐ。

⑤親の職業をつぐ（同じ道を歩む）か

男子 55%が否と答え，同じ道を歩む19%を大きく上回った。分らぬと答えた者も26%。系列差では，医系は1/3があとをつぐが人文系は2%に過ぎない。他の系列も差位は小さい。

女子 77%が否と答え，同じ道を歩む7%を大きく上回った。医系では39%が同じ道を歩むと答えた。

⑥親の職業を、どう思うか

表 9 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦誇りに思う	♂	28.3*	39.8	49.7	63.3*	40.0	—	44.2
	♀	39.3	40.5	41.2	72.7*	44.6	35.0	42.0
㊧何も思わない	♂	58.7	49.7	42.9	21.7*	56.0	—	45.8
	♀	51.3	49.0	55.9	21.2*	40.0	45.0	45.8
㊨いやだと思う	♂	6.5	3.1	3.4	8.3	4.0	—	4.0
	♀	3.3	4.6	0	3.0	6.9	10.0	5.3
㊩その他	♂	6.5	6.5	2.9	1.7	0	—	4.7
	♀	5.3	5.9	2.9	0	6.9	10.0	6.2
㊪無 答	♂	0	1.0	1.1	5.0	0	—	1.3
	♀	0.7	0	0	3.0	1.5	0	0.7

⑦将来の生活設計

表 10 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦家庭第一ののんびりした生活	♂	17.4	22.1	31.4	35.0	36.0	—	26.3
	♀	34.0	41.8	32.4	39.4	36.2	49.0	39.2*
㊧自己の生きがいのある生活	♂	63.0	61.9	58.3	51.7	60.0	—	59.8
	♀	57.3	54.9	61.8	51.5	54.6	43.0	53.7*
㊨仕事第一の生活	♂	0	1.4	0.6	1.7	0	—	1.0
	♀	0	0	0	3.0	0	1.0	0.3
㊩社会に貢献する生活	♂	4.3	4.4	6.3	6.7	0	—	5.0
	♀	2.7	2.0	0	3.0	2.3	1.0	2.0
㊪その他、分らぬ	♂	15.2	4.7	2.8	3.3	4.0	—	4.9
	♀	5.4	0.7	5.8	0	5.4	4.0	3.7
㊫無 答	♂	0	5.4	0.6	1.7	0	—	3.0
	♀	0.7	0.7	0	3.0	1.5	2.0	1.2

⑧希望する就業年限^{注1}

1 位卒業後、3～4年間の就業57%，系列別では理工系が71%で最多。2 位5年間24%，例外的に医系ができる限り働きたい20%。

注 1 設問⑧と⑨については、女子についてのみ回答を求めた。いわゆる男女雇用均等法施行の影響や、女子が、自らの職業を家庭生活の中に、いかに位置づけしているか、といった問題をみようとした項目である。

⑨女子の結婚後の就業に対する態度

表 11 (%) (N=600)

項目	専攻系列							平均
	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政		
㊦絶対 に いや だ	10.0	11.8	8.8	3.0*	10.0	12.0	10.3	
㊧夫の希望しだい、どちらでもよい	35.3	40.5	23.5*	9.1*	27.7	49.0*	35.2	
㊨家族に影響ない限り働く	44.7	45.1	61.8	63.6*	49.2	35.0*	46.2	
㊩どうしても働きに出たい	8.0	2.0	5.9	18.2*	11.5	3.0	6.8	
㊪無 答	2.0	0.6	0	6.0	1.5	1.0	1.5	

考 察

自らの職業選択基準は、適性或企業の内容を重視し、給与や知名度を下に置いており現実的である。しかし就業先の規模となると大企業志向がはっきりし、たんに甘い意識というよりも本音が出たのであろう。大学1～3年生にとって就職への精神的レディネスは十分とはいえない。そのことは就きたくない職業（種）にも表われている。例えば男女ともにセールスを1位に挙げているが、現実には大半が営業部門に就職している現状を考えると、大学生への職業教育の不足さが分る。女子に水商売が嫌われているが、系列間に差がある点は興味深い。家政系で嫌われる1位の水商売（サービス業）も、社会系では4位となる。女子は専攻系列によって、職業への価値観が異なるようである。他方、就きたい職には系列差がかなり見られたが、概して公務員、教員、マスコミ関係などが高い比率で選ばれ、これもまた現実の就職状況との差は大きく、文字通り、希望なのであろう。

かれらの親の職業についてどう思っているのだろうか。価値観や人生観を知る上でも意味がある。表9に示したように、誇りに思う、が男女とも約4割、そして何とも感じないも同じく4割ほどである。いやだと感じる者は僅かに4.5%である。しかし、あとをつぐとか親と同じ道を歩むか、となると然りと答える者は2割に満たず、人文系では2%であった。全体として親の職業はそれなりに評価するが、我が道は自分の選択、ということらしい。例外的に医系は、誇りに思うものが2/3に達し、医師がかれらにとって社会的地位の高さを自認させている。

今までのところ就職へのレディネスは十分でないが、将来は自分の好きな方向に、自分のペースで歩みたい、という考え方がはっきり読みとれた。無論、現実はそのを許さぬことだろうが、少なくとも、今までのような猛烈社員生き方は減る傾向にあるとみてよい。会社第一の慣行も、それを支持する社会構造的要因も、かれらの新しいタイプの人生観の前には、その力を次第に失っていくのではないだろうか。表10を見よう。かれらの将来の生活設計と、職業意識を併せ考えると、男女ともに自己の生き甲斐を満足させる生活が主流であり、2位は、家庭第一ののんびり生活が男子の1/4、女子の4割をも占める。系列差もあまりなく青年に共通した考え方のように

ある。

キーワード：職業観，マイペース，仕事第一よりも生き甲斐，大企業志向

ところで女子大生たちは、いわゆる雇用均等法の新時代に自らの職業生活にどんな意識をもっているだろうか。⑧で明らかにしたように、卒業後3～4年の就業を望むものが6割ほどで第1位を占め、キャリア志向はマイナーグループである。企業が最も嫌う就職後1～2年で辞める人が本調査では15%もいる。さらに結婚後の就業についても表11に示したように、家族に（マイナスの）影響がない限り働く、と答えた者が46%で1位を占めたものの、その年数は平均4年と答えている。また、夫の希望次第で、と答える者も35%を数え、家族の意向を十分考慮しての就業希望である。女子短大生の意識調査⁹⁾でも、“男は外で、女は家庭に”という考え方に積極的賛成も反対も2割に満たぬ少数派で、62%がどちらでもよい、と答えており、これらを通覧すると女性のキャリアは一般化していない。“女子は家庭に入り……”などといえばそれは時代錯誤的な観念として、むしろ今日はタブー化しているが、現実はまだあまりにかけ離れている。アメリカにおける調査研究¹⁰⁾によると、20～30代の女性は、男性にくらべて家事よりも仕事を望み、能力がすぐれていると思ひ、企業では重要かつ責任をもった仕事ができると自認しているという。日本の女子大生の職業意識はたんに低いということよりも、それなりの一つの精神構造に根強く由来しているように思える。

キーワード：女子の職業意識，家庭第一の生活信条，女子キャリアの敬遠

〔D〕 余暇に関する調査結果

①余暇の時間はどの位あるか

表 12 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列							平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政		
㊦ 1 ～ 2 時間	♂	19.5	10.9	17.7	18.4	32.0	—	15.2	
	♀	18.7	25.5	38.2*	24.2	23.1	34.0	25.3	
④ 3 ～ 4 時間	♂	52.1	42.5	49.1	50.0	52.0	—	46.3	
	♀	60.0	56.2	44.1	63.6	50.0	49.0	54.2	
㊦ 5 時間以上	♂	23.9	41.5*	28.0	23.3*	12.0*	—	33.2	
	♀	17.3	13.1	8.8*	6.0*	23.1	10.1	15.2	
㊤ ほとんどない	♂	2.2	4.8	4.6	6.7	4.0	—	4.7	
	♀	3.3	5.2	8.8	3.0	3.1	6.0	4.5	
㊤ 無 答	♂	2.2	0.3	0.6	1.7	0	—	0.7	
	♀	0.7	0	0	3.3	0.8	1.0	0.8	

②学業以外の余暇を有意義に過しているか

表 13 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㊦有意義である	♂	39.1*	28.6	32.6	26.7	40.0*	—	30.8
	♀	39.3	37.9	61.8*	24.2*	45.4	33.0	39.7*
㊧有意義でない	♂	43.5	38.1	36.0	43.3	36.0	—	38.3
	♀	29.3	37.3	5.9*	33.3	20.8	31.0	28.7*
㊨分 ら め	♂	17.4*	30.3	30.9	28.3	24.0	—	29.0
	♀	30.7	18.3	29.4	39.4*	33.8	35.0	29.3
㊩無 答	♂	0	3.1	0.6	1.7	0	—	1.8
	♀	0.7	6.5	2.9	3.0	0	1.0	2.3

③余暇の過ごし方（授業のあき時間や休講時）

男子 半端な時間だけにまとまった内容は当然少ない。1位帰宅，家事27%，2位友人と遊ぶ25%，3位読書，勉強20%，ゴロ寝19%，おしゃべり19%でクラブ活動は2%と最下位。系列差も多く，人文系では1位友人と遊ぶ44%，2位読書，勉強35%。おしゃべり28%。教育系1位勉強60%。理工系1位帰宅33%，遊び30%，ゴロ寝26%が目立つ。

女子 1位おしゃべり27%で系列差がない。2位勉強17%，3位帰宅して寝るかTVをみる15%，4位ショッピング10%。

④1カ月の小遣（下宿代や通学のための交通費，学用品，昼食代等を除く）

表 14 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体 ^{注1}	教 育	家 政	
㊦4,999円以下	♂	6.5	5.4	13.1	6.7	4.0	—	7.8
	♀	11.3	3.3	11.8	6.0	4.6	11.0	7.5
㊧5,000～9,999円	♂	26.1*	11.2	18.3	10.0	20.0	—	14.7*
	♀	21.3	20.3	29.4	15.6*	20.8	31.0*	22.7
㊨10,000 ～14,999円	♂	26.1	24.1	29.1	10.0*	4.0	—	23.5
	♀	31.3	23.5	23.5	9.1*	33.8	31.0	28.2
㊩15,000 ～19,999円	♂	10.9	17.7	18.9	10.0	12.0	—	16.5
	♀	16.7	17.0	8.8	0*	17.7	12.0	14.8
㊪20,000円以上	♂	30.4	40.5	20.6*	60.0*	60.0*	—	36.6*
	♀	19.3	35.3	23.5	67.1*	23.1	15.0*	26.3
㊫無 答	♂	0	1.0	0	3.3	0	—	0.8
	♀	0	0.7	2.9	3.0	0	0	0.5

注 1 医系の45%の者が，25,000円以上の小遣と答えている。これは全系列の最高値である。

⑤よく行う遊びごと（クラブ活動を含まぬ）

男子 1位パチンコ, 2位ボーリング, 3位ドライブ, 4位麻雀, 5位スポーツ, 6位TVゲーム。

女子 1位ボーリング, 2位スポーツ, 3位ドライブ, 4位ウインドショッピングでぶらつく, 5位TVゲーム, 6位パチンコ。

考 察

まず現代の大学生がどの位の余暇時間を背景にして行動するか、その時間を表12でみてみよう。平均して一日3～4時間が約半数を占め、ついで男子の33%が5時間以上、女子の25%が1～2時間と続く。男子はこれらを合せて80%の多くが相当な余暇時間をもっている。系列別では男子社会系に余暇が多く、42%が5時間以上と答えた。一方、余暇の少ない者は理工系の女子で47%が1～2時間以下となり、教育系も少ない。大学生の専攻系列別構成比率は、社会系で大半を占める（表1）ので、人目にふれる大学生の姿はヒマな若者と評されても致し方ない。こうした余暇をかれらは、有意義、そうでない、分らぬのほぼ3群に等分して評価している（表13）。系列別では理工系の女子、教育系の男子が平均を上回って有意義と答えたが、かれらはもっとも余暇時間の少ないグループであったことは皮肉である。概して、沢山な余暇があると男女が同様に感じ、共に同一の行動様式をとることは、最近の青年がモノセックス的思考形態と行動をとると評されることと関係しているようである。ただ、かれらの小遣の金額をみると、非常に高い者と5,000円未満の少額組に二極分化しており、経済的背景がかれらの行動特徴をつくっているのかもしれないが、今回はクロス検討していないので、詳細は分らない。

以上をまとめてみると、沢山な余暇をもち、友人とよくしゃべり、家へ帰ってゴロ寝して時折パチンコやボーリングを楽しみ、そうした過し方にまあまあ意義を感じている、と結論づけたら少々偏向した分析だろうか。しかし結果の数字はその結論を支持している。大学の年間の授業時数も少なくても当然のように認められているが、社会系などの学生には、自由研究に余暇が使えるような工夫も望まれよう。長い受験戦争の果てにたどりついた大学が、楽園やレジャーランドなどと評されぬために多面的かつ根本的な取組み方をしなければなるまい。

キーワード：多くの余暇、男女画一的行動、小遣い額の二極分化

〔E〕 政治、社会に関する調査結果

この領域の調査項目は、政治に関する設問と、社会に関する設問を明確に区分しているものではない。いずれの調査項目（設問）も、両者のテーマを含むように、できるだけ心がけたつもりである。

①支持政党

表 15 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人文	社会	理工	医・保・体	教育	家政	
㊦自由民主党など (与党)	♂	28.3*	47.3	36.6	41.7	12.0*	—	40.6*
	♀	33.3	29.4	29.4	30.3	24.6	31.0	29.5
①社会党	♂	4.3	6.5	6.9	6.7	12.0*	—	6.7
	♀	6.7	2.6	2.9	0	8.5*	2.0	4.7
㊧社会党以外の野 党	♂	8.7	9.5	5.7	6.8	4.0	—	7.9
	♀	3.3	3.9	0	0	3.1	5.0	3.4
㊨支持政党なし	♂	56.5*	35.0*	49.7	40.0	64.0*	—	42.7*
	♀	55.3	62.1	64.7	60.6	56.2	60.0	58.8
㊩無 答	♂	2.2	1.7	1.1	5.0	8.0	—	2.2
	♀	1.3	2.0	2.9	9.1	7.7	2.0	3.5

②新聞の政治欄を読むか

表 16 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人文	社会	理工	医・保・体	教育	家政	
㊦よく読む	♂	34.8	41.8*	26.3*	28.3	28.0	—	34.8*
	♀	15.3	11.8	11.8	18.2	11.5	10.0	12.7
①あまり読まない	♂	56.5	51.4	57.7	45.0	64.0	—	53.5*
	♀	71.3	72.5	61.8	69.7	71.5	67.0	70.3
㊧全く読まない	♂	8.7	6.1	15.4	18.3*	8.0	—	10.3*
	♀	13.3	15.7	26.5*	9.1*	16.9	23.0*	16.8
㊨無 答	♂	0	0.7	0.6	8.3	0	—	1.3
	♀	0	0	0	3.0	0	0	0.2

③憲法第9条, 第13条はどんな意味の条項か

表 17 (%) (N=600×2)

注1 第9条	性	♂		♀	
		♂	♀	♂	♀
正 答		48.8	47.5	10.5	3.7
誤 答		9.3	13.8	11.3	32.7
無 答		41.9	38.7	78.1	63.7

注1 第9条については、男子人文、社会系が52%で最高の正答率である。また、医系は37%で最低の正答率。一方、女子理工系64%、社会系56%、人文系50%が高い正答率を示し、最低は医系の37%であった。

2 第13条については男子社会系12%で最高、一方、教育系は0%。女子教育系は8%が最高。人文系は2%、医系は0%で最低。

④自衛隊に対する態度

表 18 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦違憲だから解散すべきだ	♂	8.7	10.2	10.9	13.3	12.0	—	10.7
	♀	5.3	5.2	5.9	6.0	7.7	7.0	6.2
④災害出動や国内治安にあってよい	♂	39.1	38.4	46.9	30.0*	40.0	—	40.2
	♀	67.3	59.5	64.7	51.5	56.9	61.0	61.0*
⑦自衛上あってよい	♂	26.0	36.4	25.8	40.0*	32.0	—	32.6
	♀	16.7	26.1	26.5	36.8*	20.8	23.0	22.6*
⑤もっと増強すべきだ	♂	6.5	6.8	6.9	5.0	0	—	6.3
	♀	0.7	0	0	0	0	0	0.2*
④その他、分らぬ	♂	19.6	7.8	9.1	6.7	16.0	—	9.3
	♀	9.3	18.5	2.9	3.0	13.9	9.0	9.3
⑦無 答	♂	0	0.3	0.6	5.0	0	—	0.8
	♀	0.7	0.7	0	3.0	0.8	0	0.7

⑤徴兵制度に対する態度

表 19 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦すすんで認める	♂	4.3	1.7	2.9	8.3*	0	—	2.8
	♀	0	0	0	6.0*	0	0	0.3
④仕方なく認める	♂	6.5	4.8	5.1	8.3	4.0	—	5.3
	♀	1.3	1.3	2.9	6.0*	0.8	2.0	1.7*
⑦あまり賛成できない	♂	8.7	18.7	14.9	18.3	24.0	—	17.0
	♀	18.0	26.1	35.3	21.2	12.3	27.0	21.5
⑤絶対に反対	♂	76.1	67.3	73.1	48.3*	68.0	—	67.8
	♀	70.0	67.3	55.9	63.6	69.2	59.0	66.2
⑦分 ら ぬ	♂	4.4	6.7	2.9	15.0	4.0	—	6.5
	♀	10.7	5.2	5.9	0	17.7	12.0	10.2
⑦無 答	♂	0	0.7	1.1	1.7	0	—	0.5
	♀	0	0	0	3.0	0	0	0.2

⑥どこの国が望ましい政治・社会形態と思うか

男子 望ましい政治・社会形態をもつ国を一つ挙げさせたところ次のようであった。1位日本26.3%，2位米国21.8%，3位スイス12.0%，そのあと英，西独など3.5%，2.2%と続き他は極めてすくない。無答21.7%

女子 1位米国23.0%，2位日本17.2%，3位スイス15.0%，そのあと英，スウェーデンなどきわめて少ない。無答30.5%

⑦日本の社会に対する不満

男子 1位政治への不満31.3%，2位税の不公平21.6%，3位福祉の貧困12.6%，4位軍拡8.8%，そのあと学歴社会，日本人の国民性など。回答率は低く57.3%。

女子 1位税の不公平27.1%，2位政治への不満22.5%，3位福祉の貧困26.3%，4位軍拡21.7%，そのあと日本人の国民性が11%，回答率は26.2%と極めて低い。

考 察

まず支持政党と政治への関心度について考察する。表15はかれらの基本的な政治姿勢を知る上に参考となろう。自民党は男子38%，女子29%，これに新自クを加えた与党全体では男子は4割を超える。野党全体では男子が15%弱，女子が8%と支持率は低く，この差は極めて大きい。しかし与党支持率が高いことが，中高年齢層の保守党支持と同じ意味ではないようである。基本的には，かれらは政治に関心がないので，問われてみれば，現在，政治を動かしている与党を支持すると答える方が考えをめぐらす必要がないからであろう。その根拠として表16に示したように，新聞の政治欄をあまり読まない者が半数を超え，これに全く読まない者を加えると，男子64%，女子87%という驚くべき高率となり，政治問題を知るに必要な情報源をほとんどもっていない。このような状況下では，かれらが日本の政治を真剣に考え，自らの価値観や理念のもとに政党を選んだとはいいがたい。表15の支持政党なしと答えた男子43%，女子59%の高率をみた時，支持政党なし派が第1党ともいえる。その理由として，かれらは政治が分らない，社会人になってから，などと答えている。受験戦争の後遺症ともいうべき解放感，多くの余暇時間，友人としゃべって過す毎日，そしてアルバイトに暮れる生活，そんな中で現代の大学生には，政治や社会を真正面に据えて意識することはあるいは荷が重過ぎるのかもしれない。次に系列別にみると，教育，人文系の男子は自民支持が最もすくない。ではかれらが革新支持かといえばそうではない。やはり支持政党なしが大変多い。その他の系列差は少ない。また総じて女子に支持政党なしが多く，新聞の政治欄を読む率の低さとよく相関している。現在の青年があまりにも政治に無関心でいると極く一握りの暴力的破壊活動主義の温床ともなりかねない。それにしても野党は大学生の関心から見事にはずれている。若い人に魅力のない野党は，その原因について反省すべきであろう。

憲法への理解度のうち，ここでは9，13条を取上げた。この条文が日本国憲法のいわば象徴的性格をもつものだけに，その理解度はそのまま政治，社会に対する基本的知識を反映しているといえよう。表17に示したごとく，第9条の正答は男女同率で約半数を占める。無答者は実は正答を知らなかったのであろう。なぜなら他の項目では無答は極めて少ないからである。したがって第13条の無答の男女78，64%もまた正答を知らないとわれ，第13条が身近かでないことを示している。次に自衛隊に対する態度について考察してみる。表18のごとく，その存在を是とする者が男子39%，女子23%であり，災害時出動のような現在の自衛隊の性格とは基本的に異なる形での是認は男子40%，女子61%と，女子の方に多い。ところで注目されることは，一層の増強に賛成

するものが男子に6.3%あったが、日本に徴兵制度が敷かれたらそれを認める者は男子2.8%に過ぎない点である。約40%の男子が存在に賛成していながら、徴兵制についての肯定は8%である。すると一体だれが武器をとるのであろうか。徴兵制は反対、軍備は拡大とも受けとれるこれらの結果はそのまま現代青年の現実認識の甘さと、政治、社会への関心の低さを示している、といえよう。なお、系列別にみると医系が徴兵制に突出して賛成派が多く、それでいて新聞の政治欄を読まぬ者が医系に多いことを併せ考えると、そこにはかれらの家庭内の思想の反映がみられるのではあるまいか。

日本の社会に対する不満は、性差もなく概して政治、税金、そして福祉の貧困などの問題を上位に挙げている。それらは今日の日本社会の問題を凹凸なく指摘しており、今まで述べてきた政治社会への関心の低さと、的確な不満への指摘とが結びつかない。恐らく、指摘した不満は、しばしば耳にする常識的なものを単に挙げたのではないだろうか。

キーワード：政治意識、無関心、支持政党なし、与党優位

〔F〕 文化に関する調査結果

① クラブ以外の一般社会の文化団体に加入しているか

表 20 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
㊦加入している	♂	23.9*	9.9	2.3	15.0	12.0	—	9.3
	♀	2.7	2.6	2.9	6.0	6.9	20.0*	7.3
㊧加入していない	♂	71.7	77.9	95.4*	73.3	84.0	—	82.3
	♀	94.0	41.8*	94.1*	81.8	76.9	74.0	83.7
㊨無答	♂	4.3	12.2	2.3	11.7	4.0	—	8.3
	♀	3.7	55.6*	2.9	12.1	16.2	6.0	9.0

②好きな作家^{注1}

男子 1位赤川次郎4.2%，2位夏目漱石3.2%，あと西村京太郎、新井素子、芥川龍之介など。外国人作家の1位A・クリスティ2.7%，2位ヘミングウェイ2.2%，3位トルストイ1.5%など。

女子 1位赤川次郎18.7%，2位夏目漱石3.2%，3位西村京太郎1.2%など。外国人作家の1位A・クリスティ9.0%，2位ヘミングウェイ3.3%，モンゴメリー3.0%など。

男女とも無答が多く、平均して日本人作家については30%，外国人作家は60%が無答で占めた。

注1 好きな作家のうち、日本人としては、中学時代か高校時代の教科書に登場する、いわゆる文豪や有名小説家の名前が多数選ばれている。

③週刊誌や新聞を読んでいるか

表 21 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
			週刊誌	♂	50.0	53.1	39.4*	65.0*	60.0
⑦読んでいる	♀	51.3	45.1	17.6*	39.4	36.2	37.0	41.5	
①ほとんど読まない	♂	41.3	41.5	48.6	30.0*	40.0	—	42.3	
	♀	21.3	19.0*	64.7*	36.4	51.5*	25.0	31.2	
⑦無 答	♂	8.7	5.4	12.0	5.0	0	—	7.3	
	♀	27.7	35.9	17.6	24.2	12.3	38.0	27.3	
新 聞	♂	84.8	87.8*	66.9*	85.0	84.0	—	79.6	
⑦読んでいる	♀	82.7	61.5*	82.3	78.8	86.9*	69.0	75.7	
①ほとんど読まない	♂	13.0	12.2	22.3	10.0	16.0	—	15.8	
	♀	16.0	5.2	14.7	12.1	8.5	11.0	10.5	
⑦無 答	♂	2.2	0	10.9	5.0	0	—	4.7	
	♀	1.3	33.3*	2.9	9.1	4.6	20.0	13.8	

④流行に対する関心度

表 22 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
			⑦流行に非常に興味がある	♂	47.8	54.7	42.9	51.7	54.5
	♀	64.7	66.0	64.7	57.6	65.4	57.0	63.5	
①全く興味ない	♂	15.2	7.8	9.9	3.3	0	—	8.4	
	♀	0.7	0.7	2.9	0	0	1.0	0.7	

無回答は10%であるため上表以外は殆んどが“ふつう”の関心度を示したものの比率となっている。

⑤日本の文化水準への評価

表 23 (%) (N=600×2)

項目	性・ 回答率	人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	平 均
		100点満点で 評価は平均点	♂・93.8%	69.7	74.9	76.0	77.9	70.5
	♀・89.3%	80.6	78.4	76.4	74.4	75.5	80.4	78.4

考 察

文化とは何か、という概念規定があいまいなために、この項目に関する今回の調査結果もまた明確なものが少なかった。まず、文化的活動(団体)に加入した者の比率であるが表20に示したように10%に満たず、性差もほとんどない。系列差は若干は認められ、男子人文系、医系、女子

家政系に多く、少ない方では男女理工系の2～3%が目立つ。人文系は余暇が多く、専攻学科の性質上、文化団体に加入する機会も多いのであろう。概してかれらは学外の生活には、遊び以外はあまり興味がないようである。

週刊誌や新聞をどの程度読んでいるだろうか。表21が示すように、読む者が4～5割を示すものの、読まぬ者もまた3～4割とかなり多いことが注目される。週刊誌については、精読組と、無関心組が二極分化しているのではないだろうか。新聞については、週刊誌よりも読む者は多い。しかし殆んど読まぬ者が平均で、男子16%、女子11%いることには驚く。人文系女子の新聞を読まない者は、16%の多数を占める。社会系女子に無答が多いのは、この中にあまり読まぬ者をかなり含んでいるのではあるまいか。現在の大学教育の内容や方法が、新聞の購読を必要としないような、社会生活から遊離した点はないのだろうか。映像文化やコンピュータ教育が進む現在、最低限の活字文化の象徴である新聞が大学生にあまり読まれていないことは憂慮すべきことである。

次に、かれらの好きな作家名をみてみよう、②に示したように、男女ともに赤川次郎、夏目漱石が上位を占め、外国人作家では、A・クリスティを挙げている。作家の好みに性差は少ないが、男子の方が好きな作家名が多様であった。また、無答が多いことは、読書をしていない者の多いことの表われらしい。作家も推理作家やSF作家が多く、純文学は極端に少ない。そして人文系に文学が多く読まれている訳でもなく、系列差のないことも目立った。以上をまとめると、現在の大学生は、じっくりと文化的環境の中に浸ることが少ないようである。しかしそれはかれらの怠慢ではない。あまりに社会の動きが敏速で、“衝動的文化”や価値観が社会的、経済的機構の中に行き渡っていることにも原因している。例えば、服装や持物の流行にかれらは至って敏感で、つねにそれを追っている者が女子の2/3、男子の大半を占め、それも系列差がない(表22)。まさにかれらは商業ベースにのせられているといった感が深い。

最後に表23は自らの国の文化水準を次のように評価している。百点満点で男子75点、女子78点。これも系列差がない。自国の文化を、Aではなく、Cでもなく、まして“再試”でもなく、“Bの上”と評価したのは、自分自身の文化的水準についての自己採点であったのだろうか。

キーワード：文化、画一的、流行、活字離れ

〔G〕 友人、異性に関する調査結果

①親友をもっているか

男子 もっている89%、いない10%、無答0.9%。系列差はないが、理工系のみ持っていないものが15%で有意に少ない。

女子 もっている94.3%、いない5.5%、無答0.2%。系列別では医系のもっている85%がやや低いほか大差ない。性差の少ない項目である。

②親友になんでも話すことができるか

表 24 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦話 す	♂	69.6	71.4	60.6	76.7	64.0	—	68.3*
	♀	80.0	83.0	76.5	66.6	79.2	83.0	80.2
①話 さ な い	♂	28.2	26.2	38.3*	20.0*	32.0	—	29.2*
	♀	17.3	16.3	23.5	30.3*	20.0	17.0	18.7
②無 答	♂	2.2	2.4	1.1	3.3	4.0	—	2.2
	♀	2.7	0.7	0	3.0	0.8	0	1.2

③親友に望むこと

表 25 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦自分を理解してほしい	♂	18.5	4.6	3.0	0	4.5	—	5.4
	♀	17.9	2.6	0	5.0	12.1	5.6	10.3
①話を聞いてほしい	♂	12.3	4.6	13.4	17.8	0	—	10.1
	♀	10.0	14.3	0	17.3	1.7	7.5	10.3
②長く変らぬ交際、裏切らぬこと	♂	21.6	60.1	49.3	42.5	54.4	—	47.7*
	♀	28.6	29.2	32.4	40.5	22.4	7.6	28.6
⑤やさしさ、思いやり、親切	♂	12.3	5.8	10.4	13.7	13.6	—	9.6*
	♀	12.2	13.6	35.3	10.8	24.1	16.2	18.2
④そ の 他	♂	35.4	24.9	23.8	26.0	27.3	—	27.2
	♀	31.3	40.3	32.4	27.0	39.7	63.1	33.0
⑦無 答	♂	19.6	64.3	61.7	25.0	24.0	—	54.5
	♀	42.7	49.7	47.1	72.7	15.4	30.0	40.0

複数回答のため、無答を除く総回答数で、それぞれの回答数を除いたもの

④異性の友人を持っているか

表 26 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦持っている	♂	69.5	72.4	56.0*	88.3*	88.0*	—	69.7
	♀	68.0	79.7	64.7	84.8	81.5	76.0	76.0
①い な い	♂	30.4	24.5	43.4*	11.7*	12.0	—	28.7
	♀	30.7*	18.3	32.4*	12.1*	17.7	23.0	22.5
②無 答	♂	0	3.0	0.6	0	0	—	1.7
	♀	1.3	2.0	2.9	3.0	0.8	1.0	1.5

⑥両親は、異性との交際に応じた態度をとっているか

表 27 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列							平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政		
㊦肯定的	♂	17.4	19.0	15.4	20.0	44.0*	—	19.0*	
	♀	24.7	20.9	29.4	27.3	26.2	21.0	23.8	
㊧否定的	♂	0	3.7	3.4	5.0	8.0	—	3.7*	
	♀	8.0	15.7	11.8	18.2	12.3	13.0	12.5	
㊨無関心や放任	♂	52.2	49.0	34.9*	48.3	36.0	—	44.5*	
	♀	34.0	41.8	23.3*	36.2	43.0	42.0	38.8	
㊩無 答	♂	30.4	28.3	46.3*	26.7	12.0*	—	32.8	
	♀	33.3	21.6	35.3	18.2	18.5	24.0	24.8	

⑥異性の友人はどこで(どんな時)出来たか

男子：1位クラブ活動31%，2位アルバイト26%，3位勉学を通して19%，4位大学以外の場で9%，その他15%，系列別では，社会系では1位アルバイト33%，回答率70%

女子：1位クラブ活動30%，2位勉学を通して24%，3位アルバイト13%，学外11%，その他16%，系列別では，理工系が1位勉学50%

⑦異性の友人に何を望むか

男子：1位やさしさ(女らしさ，甘えさせてほしい)25.3%，2位よい友人18.8%，3位責任感13.3%，4位愛情，信頼9.9%，5位自分につくせ5.8%，6位知性1.7%，その他25.3%，系列差はすくない。回答率48.8%

女子：1位やさしさ27.3%，2位愛情，信頼11.1%，3位責任感9.0%，4位よい友人6.7%，5位自分につくせ4.6%，その他41.2%，回答率65%

⑧異性のタイプの好き嫌い(複数回答)

表 28 (%) (N=600×2)

(男 子)		(女 子)	
好きな女性のタイプ	きらいな女性のタイプ	好きな男性のタイプ	きらいな男性のタイプ
回答率 71.7	回答率 68.7	回答率 89.3	回答率 81.8
やさしい人 29.3	自己中心でわがままな人 23.1	やさしく思いやりのある人 27.2	無責任な自己中心的でわがままな人 15.1
明るい人 15.1	軽率な行動，おしゃべりな人 11.2	男らしい人 9.1	不潔な人 13.0
知的な人 13.0	だらしなく不まじめな人 10.7	明るくてユーモアのある人 9.0	男らしくなく，ナヨナヨした人 11.2
可愛い素直な人 11.2	思いやりのない冷たい人，意地悪 8.9	まじめ，正直で誠実 8.0	しつこい人 9.4
他人の立場のわかる苦勞人 9.5	素直でない意地っ張り 3.4	頼れる人 8.0	決断力のない人 9.0
美人 5.1	見栄っぱりで気取りや 2.2	精神的におとな 6.9	不まじめな遊び人 7.1
おとなしい人 3.0	その他 40.5	自分の考えをしつかり持ってる人 6.7	自信過剰な人 1.0
その他 13.7		その他 25.0	その他 34.2

⑨結婚前の純潔観

表 29 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉞必要, 大切と思 う	♂	23.9	29.3	26.3	30.0	40.0*	—	28.5*
	♀	32.7	28.1	29.4	21.2*	36.9	48.0*	34.2
㉟そうは思わない	♂	50.0*	39.5	33.7	25.0*	40.0	—	37.2*
	♀	21.3	32.7	17.6	24.2	26.9	20.0	25.2
㊱分らぬ, その他	♂	26.1	29.6	36.6	33.3	20.0	—	31.3*
	♀	45.4	37.3	53.0*	51.5	35.4	32.0	39.7
㊲無 答	♂	0	1.7	3.4	11.7	0	—	3.0
	♀	0.7	2.0	0	3.0	0.8	0	1.0

⑩自分の結婚相手に純潔性を望むか

表 30 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉞望 む	♂	23.9*	40.0	33.7	23.3*	40.0	—	35.3*
	♀	11.3	19.0	26.5*	9.1*	10.8	22.0	15.7
㉟場合によってそ うでなくとも止 むを得ない	♂	26.1	25.2	28.0	20.0	24.0	—	25.5
	♀	26.7	13.1	11.8	12.1	19.2	22.0	19.2
㊱気にしない	♂	45.7*	26.9	18.3	28.3	32.0	—	26.2*
	♀	46.7	54.9*	38.2*	60.6*	51.5	39.0*	48.8
㊲そ の 他	♂	4.3	7.5	14.3	16.7	4.0	—	10.0
	♀	14.7	12.4	20.6	15.1	15.3	17.0	15.0
㊳無 答	♂	0	0.3	5.7	11.7	0	—	3.0
	♀	0.7	0.7	2.9	3.0	3.1	0	1.3

⑪性的経験の程度

表 31 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉞全く経験がない	♂	60.9*	36.1	64.6*	26.7*	44.0	—	45.7*
	♀	49.3	47.1	55.9	36.4*	48.5	59.0	49.8
㉟キスやベッティ ングなどを経験 した	♂	21.7	37.1*	15.4	5.0*	24.0	—	25.8
	♀	24.7	20.9	23.5	15.2*	20.8	23.0	22.0
㊱性交の経験があ る注1	♂	8.7*	19.4	11.4*	63.3*	12.0	—	20.3
	♀	12.7*	21.6	8.8*	39.4*	20.0	10.0*	17.0
㊲無 答	♂	8.7	7.5	8.6	5.0	20.0	—	8.2
	♀	13.3	10.5	11.8	9.1	10.8	8.0	11.2

注 1 性交経験平均年齢 男子17.11月, 女子17.6月

考 察

親友を持っている者は、9割近い。多くは4～5名の親友をもっている。かれらにとって親友の概念とは、“広く浅くつきあう大いに気の合った友達” のようである。系列差、性差もほとんどない。だが親友の果す役割は大きく男子68%、女子では80%が親友には何でも話すといい、特に医系においてその役割は大きい。6年間の医系の生活、あるいは学内での生活時間が長いことが親友の機能を大きくさせるのであろう。表25は、親友に望むことをまとめたものである。平均して“裏切りのない長い交際”を望んでいる。その傾向は男子に多く、社会系で特に目立つ。ところで、設問が「望むこと」なので要求が多いのは当然だが、「話を聞いてほしい」や「裏切らないやさしい思いやり」といった情緒面の期待が多い点が目立つ。現代の青年のやさしさ志向は、本来、家庭から与えられるべき情緒性が意外に不足しており、それが親友への希望となって表われているのかもしれない。ともあれ親友間の切磋琢磨などという感じからはほど遠い。青年達の幼い部分を親友との関係の中に見出すことができるようである。性差をみると、女子の方が男子よりも、助力や受容、やさしく思いやってほしい、などが多い。これは女子大生の愛着の構造の研究¹¹⁾とも共通している。

キーワード：親友、やさしさ志向、広く浅い交際、多数の親友

次に異性との交際について考察する。表26に示すように女子の方が異性の友人を持っている率がやや高い。異性の友人を持つ者の比率は、過去20年間、あまり変化しない。社会的環境が異性交際を自由化させていくこととは関係なく、性格的に異性との交際が苦手な者が3割程いるのであろう。この項目では系列差が目立ち、医系は異性との交際が多く、理工系は少ない。⑥の異性の友人の出来た機会をみても分るように、学内クラブ活動が1位を占めることから、女子の少ない理工系に異性の友人が少ないのは当然であろう。また、医系に異性の友人が多いが、これは様々な背景があると思われる。表29の結婚前の純潔観に示したように、医系の女子は、純潔の必要性が有意に低く、愛情があれば、婚前の性交を是認する者が多い。これは、今の自分の異性関係のケースを思い浮べてのことであり、自己防衛とも受けとれる。その他、経済的な豊かさ、長く厳しい受験競争の果ての徹底した解放感なども背景に考えられる。

大学生の親たちはかれらの異性交際にどんな態度をもっているのであろうか。直接、両親の態度を問うた訳ではないが、かれらの目に映った間接的な答が表27に示してある。驚くほど無関心や放任が多い。また、交際に肯定的な教育系男子を除いて、肯定派は女子に多いが、全体的には無関心や放任が男女とも圧倒的に多い。後述する性的経験が高い事実(表31)を考える時、親の好ましいかわりが望まれる。また、⑥で示したように異性の友人をつくった機会がクラブ活動やアルバイトであったことを考えると、今やアルバイトが金を得る目的だけでなく、交友や異性交際の場になっている。

大学生たちは、異性の友人に何を望んでいるか。これは異性交際への価値観や、専攻学問の特

徴を知る上でも興味がある。⑦に示すように回答率が低いのでたんに傾向を示すに過ぎないが、男子は女子にやさしさや思いやりを求めるものが1/4、ついでよい友人を望み、女子はやさしさのほか、信頼や愛情を求めている。この項目では系列差はなく、若干の性差が目立った。それは異性への価値観の相違ともいえよう。例えば、よい友人であってほしい、は男子19%女子7%で有意差を示し、後述するような純潔観と並んで、異性との交際が、男子が性交渉をもってもたんなる友人程度の意識であることを示唆している。

表28は、好きな(嫌いな)異性のタイプを1つだけ挙げたものであり、特定の異性の友人に求めるものとはやや異った意味をもっている。ここでも男女ともやさしさ志向がよく表われている。そして嫌いなタイプも性差が少なく、自己中心的なわがままが嫌われている。さらに男子は、軽卒でまじめでだらしない女性を嫌うようで、男子の描く理想像は、“やさしく知的で、明るい軽はずみはしない清潔な女性”となり、いわゆるお嬢さま志向に象徴される。そこには、キャリアウーマンの片鱗もない。結局、新人類よりも古いタイプの異性が好まれているらしい。

キーワード：異性との交際、親の無関心、古風な理想像

性に対する価値観や態度を表29、30にまとめた。まず婚前の純潔に対する意識は、大切である、そうは思わない、分らぬでほぼ三分され、この傾向はそのまま現代の大学生の性的体験の程度を物語っているようである。性差をみると、女子の方が男子よりも純潔の必要性を感じている。系列別では教育系や人文系の男子に他と異った特徴を見せたが、全体的には差は少ない。

この問いを一步進めて、将来の結婚相手が純潔であってほしいか、の項目では性差ばかりが目立ってこの問題が男女間の基本的な価値観の相違を示すようである。例えば、女子は男子よりも結婚相手が純潔でなくともよいという答が最も多く、49%を占め、逆に男子は女子に純潔を求める答が第1位で高率を示した。このことは男子が女子よりも純潔さを必要としない者が多いと答えた表29の結果と一見矛盾するように思えるが、表29は、実は男子が自分の純潔さについて答えたものであり、一方、表30の方は当然、相手方の純潔さを問題としたのであろう。男子は多くの女子と性的交渉をもちながら結婚相手にはそうはさせたくないという極めて自己中心的な要求が見られる。こうした男子の意識の底には、女子の性に対して商品的価値観をもつかのよう思える。しかもこれを増幅させるかのごとく、女子は男子に対して性の面で極めて甘く、自尊の念に乏しい。なぜなら、表30に示したごとく女子の半数は、男子の婚前の純潔さを気にしないと答え、男子のその2倍に達する。これはたんに女子の寛容さを意味するものではなく、日本の社会の性に対する価値観として、女性軽視の風土性の結果であろう。また、女子特有の長所である母性愛的意識が、男子の狡猾さに利用されている、とも分析できる。

キーワード：性の価値観、男子の自己中心性、女子への性差別

表31はかれらの性的経験を示したものである。性交経験は男子20%、女子17%であったがこの種の調査は本来非常にむづかしい。今回も無記名式調査でありながら、男子8%、女子11%が無

答であった。おそらくこの中の何%かは、何等かの性経験のあった者であろう。また日本性教育協会が1981年に調査したところ、男子33%、女子24%の大学生を性交経験者としているが、これは大学4年生までを含んでおり、本調査の18~20歳を対象としたものとは若干異って当然である。

さて、表31が示す特徴は次の諸点である。まず系列別では性的経験に差が多い。特に医系は男子63%、女子39%と群を抜き、そしてキスやペッチョングなどの程度でとどまることが有意に少ない。こうした医系の学生のやや自制に欠けた行動は、性への価値観や異性の友人の数などとも関係があるようである。芸術系の大学においても医系とよく似た結果が示された調査¹²⁾があり、専攻系列による差が大のようである。また、理工系学生は性経験が比較的少ないが、さきに述べたように男女の構成比によるものであろう。さらに人文系は男女とも性経験が少ないが、今まで考察してきた多くの調査領域で、自由闊達、多様な思考形態をみせてきたことを考えると、やや意外な結果であった。恐らく人文系は行動面では、自制的なのであろう。表31が示すもう一つの特徴として、性的経験が進行の度を増すにつれ、該当する者の比率が減少する。これは一見当然のようだが、社会系と医系には、中間的経験層が少なく、さきほどもふれたような all or nothing の傾向をみせる。

なお平均的性交経験年齢は、男子17歳11カ月、女子17歳6カ月であった。

キーワード：性体験，専攻系列差大，平均17~20%

〔H〕 家族に関する調査結果

①精神的悩みは、誰に打ちあけるか

表 32 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列							平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政		
㊦ 父	♂	4.3	4.8	4.6	8.3	4.0	—	5.0	
	♀	1.3	0.7	0	12.1*	3.1	0	1.8	
① 母	♂	8.7	12.2	10.3	11.7	12.0	—	11.3	
	♀	16.0	13.1	29.4*	30.3*	15.4	18.0	17.0*	
㊦兄 姉	♂	2.2	5.7	2.8	21.7*	4.0	—	6.2	
	♀	5.3	7.2	2.9	15.2*	5.4	7.0	6.5	
㊦友 人	♂	58.7	65.0	56.6	45.0*	72.0	—	60.3	
	♀	64.0	67.3	52.9	30.3*	66.2	59.0	62.0	
㊦そ の 他	♂	23.9*	9.2	21.2	10.0	8.0	—	13.8	
	♀	8.0	9.2	8.9	9.1	7.7	11.0	8.8	
㊦無 答	♂	2.2	3.1	4.6	3.3	0	—	3.3	
	♀	5.3	2.6	5.9	3.0	2.3	5.0	3.8	

②家で話合いや団欒の機会があるか

表 33 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㊦よくある	♂	21.7*	36.1	41.1	53.3*	40.0	—	38.3*
	♀	48.7	39.2*	61.8*	54.5	50.0	45.0	47.0
㊧時々ある	♂	60.9*	49.0	49.1	31.7*	52.0	—	48.3
	♀	36.0	46.4	32.4*	36.7	40.7	47.0	41.3
㊨ほとんどない	♂	17.4	10.9	8.6	10.0	8.0	—	10.5
	♀	14.7	13.7	5.9	3.0	8.5	8.0	10.8
㊩無 答	♂	0	4.1	1.1	5.0	0	—	2.8
	♀	0.7	0.7	0	6.0	0.8	0	0.8

③家庭に対して不満があるか

表 34 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㊦あ る	♂	28.3	14.6	16.6	26.7	36.0	—	18.3
	♀	26.7	22.9	17.6	24.2	21.5	12.0	21.5
㊧な い	♂	37.0*	54.8	54.3	61.7*	52.0	—	53.8*
	♀	37.3	40.5	58.8*	36.7	36.2	41.0	39.7
㊨どちらともいえない	♂	34.8	30.0	26.9	10.0*	12.0	—	26.7*
	♀	35.3	35.9	23.5*	36.7	41.5	47.0	38.2
㊩無 答	♂	0	0.7	2.3	1.7	0	—	1.2
	♀	0.7	0.7	0	3.0	0.8	0	0.7

④家族と衝突することがあるか

表 35 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㊦めったにない	♂	32.6	31.6	39.4	33.3	36.0	—	34.3*
	♀	23.3	24.8	29.4	33.3	27.7	27.0	26.2
㊧時々ある	♂	63.0	60.9	53.7	33.3*	56.8	—	56.0*
	♀	68.0	66.7	67.6	51.5	61.5	68.0	65.3
㊨いつもする	♂	4.3	5.8	5.8	23.3*	8.0	—	7.5
	♀	8.0	7.8	2.9	12.1	9.2	5.0	7.7
㊩無 答	♂	0	1.7	1.1	10.0	0	—	2.2
	♀	0.7	0.7	0	3.0	1.5	0	0.8

⑤家庭で認められ、期待されているか

表 36 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
㉗非常に期待されている	♂	13.0*	20.4	24.0	45.0*	36.0	—	24.0*
	♀	13.3	15.0	17.6	54.5*	22.3	4.0*	16.7
㉘ふ つ り	♂	63.0	53.4	58.3	23.3*	52.0	—	52.5*
	♀	65.3	69.3	79.4*	36.7*	61.5	74.0	66.2
㉙期待されていない	♂	15.2	9.9	8.0	11.7	4.0	—	9.7
	♀	11.3	10.5	2.9	3.0	6.9	16.0	10.0
㉚分らない	♂	8.7	14.6	8.0	18.3	8.0	—	12.3
	♀	8.7	4.6	0	3.0	7.7	6.0	6.2
㉛無 答	♂	0	1.7	1.7	1.7	0	—	1.5
	♀	1.3	0.7	0	3.0	1.5	0	1.0

⑥両親に望むこと

表 37 (%) (N=600×2)

父親に望むこと注1			母親に望むこと注2		
㉗健康に注意して長生きしてほしい(節煙, 節酒, 運動, 仕事をへらすなど)	♂	50.0	㉗健康に注意して長生きしてほしい(すこし休養して)	♂	32.2*
	♀	23.7*		♀	20.0
㉘威厳をもち自信をもって, 強くあれ	♂	11.6	㉘やさしく, 母親らしく	♂	4.1
	♀	13.4		♀	9.1
㉙子供を理解して	♂	13.1	㉙子供を理解して	♂	5.0
	♀	17.4		♀	10.3
㉚きびしすぎるのでやさしい会話を	♂	2.2*	㉚静かに, うるさくわめかず, 子離れして	♂	14.5
	♀	14.0		♀	16.7
㉛道徳的であれ, 身勝手をやめて夫婦仲良く	♂	4.1	㉛身勝手をやめて, しっかりして	♂	7.9
	♀	3.6		♀	5.9
㉜そ の 他	♂	19.1*	㉜自分を抑圧しないで楽しくすごせ	♂	8.3*
	♀	27.9		♀	1.2
			㉜そ の 他	♂	28.1*
				♀	36.7

注 1 回答率, 男子 53.3% 女子 82.3%

2 回答率, 男子 40.3% 女子 67.7%

⑦中高生の頃、家の人に暴力を振るった経験とその対象

表 38 の 1 (%) (N=600×2)

項目	性	専攻系列						平均
		人 文	社 会	理 工	医・保・体	教 育	家 政	
⑦あ (対象別比率は 表38の2参照)	♂	15.2	22.1	12.6	8.3*	20.0	—	17.3
	♀	10.0	13.7	5.9*	12.1	7.7	9.0	10.2
①な	♂	82.6	76.9	81.1	88.3	80.0	—	79.8
	♀	88.7	81.0	91.2	78.8	63.8	88.2	80.8
②無	♂	2.2	1.0	6.3	3.3	0	—	2.8
	♀	1.3	5.2	2.9	9.1	28.5	3.0	9.0

(表38の1で“ある”と答えた者のみ)

表 38 の 2

	対 象	対象別比率	全調査人数 に対する比
♂	父	28.7	} 17.3
	母	49.6	
	その他	21.8	
	計	100.1	
♀	父	14.8	} 10.2
	母	60.7	
	その他	24.6	
	計	100.1	

⑧何歳で結婚し、子供は何人ほしいか

男子 平均27歳2カ月。系列差は少ない。医系が28歳1カ月、教育系26歳11カ月が目立つ。子供は2.4人。人文系が2.1人、医系が2.7人が目立つ。

女子 平均24歳9カ月、医系は26歳10カ月のほか差はない。子供は男子同様2.4人。理工系2.1人、家政系2.6人が目立つ。

考 察

青年が家族に抱く意識は、幼児期からの持続したかかわりの中で形成されてきたものだけに、青年の精神構造を理解する上の手がかりとなろう。

精神的な悩みは誰に打ちあけるか、という点でみる限り家族の果す役割は小さい。父親は男子5%、女子2%が相談相手としているに過ぎない。友人が6割以上も占めているが同種の他の調査でも、また過去20年間の調査も同様な結果である。しかし友人への相談の多くは、自我の根底を揺がすようなものや、危機的な破局を意味するようなケースではなく、いわば青年期特有の日常の困ったことや心配事が中心であろう。その点では友人の機能が重視されて当然であり、表32から青年と家族との関係が稀薄とみることは妥当ではない。系列別にみると、医系や理工系の女

子に母親を頼るものが有意に多く、その分だけ友人を頼るものが少ない。ことに医系では男女ともその傾向が強い。医系に親離れ出来ていない学生が多いのは、長く厳しい受験戦争の中で、友人よりも母親のかかわりの深さの表れとみてよいだろう。しかし全体的にみれば、性差も系列差も目立つものではない。

家族との生活をみてみよう。表33で分るように家庭での団欒の機会は、よくある、時々あるを加えると90%に近い。家族バラバラの生活、カギっ子、そして最近ではカウチポテト族などと家族の凝集性の低下が指摘される今日、意外である。あるいは、実際に物理的には家族の相寄る時は少ないかもしれぬ。しかしかれらの認識としては十分に意志の疎通が図られているのではないだろうか。そうした意識は日本の青年たちの家族とのつながりの根幹になっている。たとえば表34をみてみよう。家庭への不満は実に少ない。系列別にみても僅かに人文、教育系にやや多くみられるだけで、専攻系列を超えた現代青年の特徴といえる。さきの表33とともに、家庭に対する潜在的かつ究極的な依存性を示唆するものと考えられ、これが現代青年の精神構造の一つの特質を形成していると思われる。“青少年が家庭に望むこと”への調査¹³⁾でも、いざという時に家庭が力になってくれる(30%)と答えたものが1位であったこともこれを裏書きしている。表35をみるとその感を一層深くする。第2反抗期を終えたかれらは、最早めったに家族と衝突しない。そこには系列差も性差もなく、青年の共通性であることを示している。青年の中には、無論、不満や衝突もある。それは恐らく幼児とちがひ、自我に関与するような事柄であって皮相的なものは少ないと思われる。そうであるとすれば、青年の大多数が不満も衝突もほとんどないということは、青年の精神構造の中の家庭の重さ、甘えの構造にも似た、根強い依存性を感じさせる。

表36は親たちがかれらに寄せる期待感である。ふつうの期待と、非常に期待するを合わせて男子77%、女子83%にも達する。特に医系の期待感の強さは群を抜くが、これは親の経済的負担の大きさと、職業を継がせたい気持ちと比例しているのかも知れない。

キーワード：家族関係、潜在的依存性、親からの期待

表37は、大学生が両親に望むことを調査したものであるが、同時に青年が両親に抱く理想像の表現も含むといえよう。回答率が低く、系列差もあまりないことから、この結果はたんに参考程度のものに過ぎぬ。すなわち男女とも両親の健康を望み長命を願うものが1位で、特に男子の父親に対する場合は回答者の5割を超えた。内容もキメこまかく、節酒、節煙、過重労働を減らし休養のすすめなど多く、男子が父親を受身の愛情の対象から、能動的な愛の対象に変わりいく発達段階の特徴をよく示している。また、もっと威厳をとか自信を持って強くあれ、といった父権の回復を望む答が多いことも注目される。一方、母親に対しては、健康についてが1位であった点は父親の場合と同じである。4位ではあったが、母親に静かに、うるさくしないでとか、子離れして、といった厳しい注文があったことと、自分を抑圧しないで楽しく過して、といった同情の表現があったことが目立った。これらの結果を通覧すると、父親には、もっとやさしい対話を望む

一方で、父権の確立を期待し、母親には感情的行動を嫌い、主体的な生き方、そして母親らしいやさしさを求めている。このように父母に対する役割期待がはっきり異っていることは極めて注目される。大学生の親志向に関する研究¹⁴⁾によると、大学生男子は、将来、親になった時、子の身の世話は、主に妻が76%、夫婦で等分23%、夫がする2%であり、女子では妻が83%、等分17%、夫が0%となっており、性差がない。さらに大学生の結婚後の家事労働の調査¹⁵⁾でも、男女とも妻の主たる仕事（多少は夫も関与する）が1位であった。これらの結果をみると、男女同質、同量の労働が通例になろうとしていく今日、青年の意識は夫婦の性役割の相違を明確に認めているように思える。また上述したような親への役割期待は、期待であると同時に、今、親たちに欠如している点を指摘したともいえよう。

概して冷静、客観的に親を見据えているようであるが、かれらも第2反抗期のころは家庭内暴力を多少は経験している。表38の1は、男子17%、女子10%が中高生の頃、暴力を振ったという。系列差は医系の男子、理工系の女子の暴力がやや少ない程度で差は少ない。暴力の対象は、表38の2のように、男子では母親が50%、女子では同じく61%で母親は暴力の対象になり易い。これが精神分析的な捉え方、すなわち幼児期の母親からの厳しいしつけに対する抑圧された敵意が、青年期に表面化したものかどうかは分らぬが、やはり考えさせられる問題である。

自分たちの将来像としての家庭は、男子が平均27歳2カ月、女子が24歳9カ月で結婚し、男女とも子供は2.4人を持ちたいと考えている。そして子供は不要と答えた者は男子で1.9%、女子3.5%と低率であり、かれらが男女ともかなり平凡な道を志向していることがうかがわれた。

Ⅳ 総 括

以上、大学生がかかわる8領域（A～H）にわたって調査結果に基づき考察をすすめてきた。最後にこれらを、①大学生活との関わり、②社会への関わり、③人間との関わりに分けて若干クロスした検討も加え、さらに④性差と専攻系列別の差異特徴について述べ、とりまとめて結語としたい。

①**大学生活との関わり** キーワードにも示したように、大学が基本的には就職のための必須なステップという認識のもとに、相当な余暇時間を持って友人との交際に時を費している。経済的には、恵まれぬ者と苦しいものが二極分化している中で、アルバイトはますます大学生活の中でウェイトを占め、大学のレジャーランド化は今や、いずれの大学にも普遍的な現象のようである。そうした傾向にかれらはさして不安も感じていないらしい。何故ならば激しく長期の受験競争を、大なり小なり経験したからであろう。つまり、受験戦争や浪人生活が通例になれば、その厳しさが増す程に反動的に大学のレジャーランド化を増幅させるという皮肉な結果を招来している。数多の大学生が“入るに難く、出るに易し”と現在の大学を評価しているのもまさにこの現

象をさしているのであろう。

本来、最も文化と近い関係にある筈のかれらが、好きな作家は、と問われれば推理作家か、高校、大学受験のさいに目にふれた文豪の名前が出てくることは、大学までの道程が文化とは縁遠い受験のテクニックの暗記と、いかにゆとりのない生活の連続であったかが想像できる。ゆとりとは、たんに物理的な時間ではない。何者かによって敷かれたレールの上を、進学というプログラム通りに過す生活、そして母親は教育産業に支払う莫大な費用をつくるため、家をあけて仕事に出る暮らし。そこには文化の入りこむゆとりはない。新聞すらあまり読まないかれらを、識者はたんに大学生の勉強不足といえるであろうか。偏差値教育、大学の序列化のような、ほとんどかれらには責任のない、構造的な歪が、今、大学生の生活に大きくのしかかっている、といえまいか。

②**社会への関わり** かれらの半数が、将来の生活を自己の生き甲斐のあるものにしたいといい、女子の半数近くは、家庭第一の、のんびりした生活をと答えたこと、さらに女子が結婚後の就業についてあまり積極的でないことなどをみて、単純にかれらが安易な生き方を求めている、とはきめつけられないように思える。以上のような答の背景には、かれらが過してきた家庭生活への心の奥の不満を反映しており、両親の生き方をみて一種の反面教師的な理解やカギっ子であった頃の反動的要求とも受けとれる。例えば[H]領域で、父に対してもっと休養を、といい、母に対しては自分を抑圧せず好きなことをして、というかれらの要望はそれを物語っている。

確かにかれらは無気力な大学生生活を送っている、と自認している。しかし将来の生活は親とはちがって、自己の生き甲斐と家庭第一主義を求めるのはよいが、その延長線上に無責任と奔放な生活があるようでは、いささか問題である。よい意味の西欧的合理主義や主体性の確立した個人とつながるような“生き甲斐のある生活”であってほしいし、また、そうかれらを指導したいものである。宗教一つにしても、かれらの心の支えとしてほとんど機能していないことが今回の調査で分った。精神的に孤独なかれらが、やがてさめたエゴイストになる危険性は大きい。そしてなお、日本を最も望ましい国として挙げているかれらに、社会もまた責任を感じねばなるまい。

③**人間との関わり** 友人との関わりはかれらの心の支えとなっている。しかしそれ以上の、かれらの自我中枢における家族とのつながりは、はかり知れぬ程大きい。友人には表層の日常的な交際の役割を、そして家族には危機的場面での潜在的な援助を求めているのが構図であった。かれらの深層心理には“家へ逃げこむ”意識があり、それが、かえって反社会的な行為を抑制する安全弁として作用しているのもであろう。多くの国際比較をみても日本の青年が、いわゆるおとなしいのは、こうしたメカニズムによるものであろう。

それにしても、かれらが親に役割分化を強く求めていることに驚かされる。“男は外で女は家を守る”などという考え方は、現代では性差別の象徴としてタブー化しつつあるにもかかわらず、かれらは親に対し性役割の分化を求めている。これをたんに日本の古い文化の残滓と片付けるこ

とは出来まい。性役割の受容に関する研究¹⁶⁾では、父母とよい関係をもつ女子大生ほど女性役割の受容率が高いという。また女子の性行動における不適応者は、父親との関わりの少ない者に多く¹⁷⁾、同様に前出の研究¹⁶⁾でも人生に貢献する態度の習得は父親とかかわりのよいものに多いという。女子の人生観の確立や、よい適応に果す父親の機能はきわめて大きく、その意味での性役割の分化を検討する必要性を感じる。

④性差と専攻系列差 項目を個々に眺めてみると、かなり性差や系列差のはっきりしたものも認められたが、しかし性差も異性への希望や純潔観、宗教観のようなものに多く、生活の生態的な面では少なかった。つまり男女とも、ほぼ同様な動機で大学へ進学し、同じように勉学し、余暇を過し、そしてほとんどすべてのものが家庭に不満もない。こうした mono-sex ともとれるような行動形態をみて、性差別のない新しい文化や意識が生まれつつある、などという分析は妥当でない。むしろ、画一的行動生態を、現代社会がかれらに押しつけたともいえ、社会のメカニズムが青年の個性化を減少させただけでなく、人間固有の自らの性の特質の表現を抑圧させたともいえよう。

系列差も、経済的に恵まれた背景をもつ医系に多くみられたものの、行動生態や意識構造についての面では大学生全体の共通性の方が目立った。その理由は、現在の大学生が主体性をもって自己の学問の専攻分野を選択することが少なく、行きたい学科よりも、入れる学科を、偏差値などを基準として教師から、あるいは教育産業の情報から与えられ、自己の進む道を他者に決めってもらう状況にあるからといえよう。かれらを取り巻くプログラミングされた社会環境や受験競争が続く限り、青年が真に個性的な能力を発揮できるような多様な生き方をすることはむずかしい。本調査は、こうした青年が置かれた閉塞的状况や課題を示唆するものであったように思う。

参考文献および引用資料

- 1) 大学生の生活と態度について 駒崎勉 富士短期大学紀要 10, 287~312, 1965
- 2) 大学生の生活態度と意識構造の推移 駒崎勉 日心論文集 49, 457, 1985
- 3) 学校基本調査 文部省 1984
- 4) 青年心理学 教師養成研究会編 1954
- 5) 現代青年像についての一考察 岡村一成 応心論文集 54, 54, 1987
- 6) 女子短大生の大学に対する認知構造 森和彦 応心論文集 54, 55, 1987
- 7) 女子学生の生活態度・意識について 野村晶子 教心論文集 28, 358~359, 1986
- 8) 朝日年鑑 1985年版 朝日新聞社
- 9) 城西大学女子短大生の意識構造 後藤敏夫, 藤田主一ほか 同大学経営学科共同研究 1986
- 10) 女性が働くことについての(アメリカにおける)態度, 意見調査 馬場房子ほか 応心論文集 44, 41, 1982
- 11) 大学生における愛着の構造 戸田弘二 日心論文集 48, 556, 1984
- 12) 現代大学生の意識と性行動 松谷徳八 教心論文集 26, 504~505, 1984
- 13) 青少年白書 総務庁青少年対策本部編 昭和62年版 1987
- 14) 大学生の子供観と親志向意識に関する調査 永沢幸七, 山田順子 日心論文集 50, 466, 1986

- 15) 夫婦の役割分担に関する研究 森永康子, 越良子 教心論文集 28, 192~193, 1986
- 16) Experimental analysis of the conscious structure of the sex-role-acceptance in the female adolescents among the girl students. K. Tada & Y. Katada, Jap. J. of Psychology 58, 5, 309~317, 1987
- 17) 大学生の性的行動に関する一考察 特に女子大生の性的経験と生活背景, 性意識などとの関係について 駒崎勉 教心論文集 28, 364~365, 1986
 (注: 日心→日本心理学会, 教心→日本教育心理学会, 応心→日本応用心理学会のそれぞれ略記である。また参考文献の表示は, 巻, (号), 頁, 発刊年の順に略記した)

付記 本調査を実施するに当たり, 多数の被験校のご助力を頂いた。貴重な時間を割いて直接, 調査を実施いただいた先生方に衷心より感謝申上げる。また, 資料整理に協力した本学学生諸君の労を多としたい。その氏名を記して謝意を表する。

ロウマテリアルの整理担当 [経済学部] 湊崎義一, 渡辺昌行, 埴敏明, 榎本勝, 山本要, 内野信人, 伊藤康夫, 岡村恵一, 秋和拓, 阿部雄児, 佐々木正博, 武田潤, 阿部耕一, 相馬弥宗, 吉田富士雄, 徳田正則, 羽田敏, 奥田透, 橋本典幸, 堀越巖, 水沢豊稔, 藤野浩二, 河合一, 沢口大介, 多田好貴, 武井重治, 宮崎徹, 江原清, 松本浩樹

統計資料の整理担当 [同学部] 小山智樹, 生沢一明, 相良純

[薬学部] 戸島由美子, 今井友子